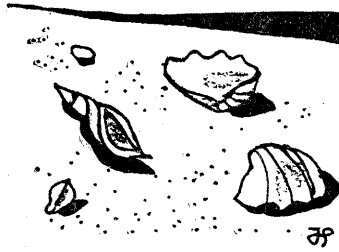


活は、理論ではなくてやはり体験を通さなくては得られないものがある、よくよ考えて、子供を怖がっているよりも、何でもなく一緒に遊んでいいうちに子供の心とのつながりを得る事が出来るのだなと感じました。

私達は車掌さんの「北海道、北海道でございます。お降りの方はお早く願います」という声でキップを渡し汽車から降りました。

そしてお庭の草原（牧場）へ皆で出かけて行きました。いつの間にか、その子の右手を私の左手の掌に感じながら。



—四十四の武器—

子供たちは私が新参者だからと遠慮はしない。彼等の前にあつては他の先輩と同等に見られ、それ以上に彼等の先生として一番信頼される。四十四の武器は意外にもその引金は硬かった……。

Y 生

午後の話合いの時、園長は「貴女達は四十四のすばらしい武器を持っている。」と云われた。

日曜日の朝の事である。「きのう遊園地に行ったよ。」「あたしはね、お花見に行ったの。」「僕ね、帆柱山に登った。」と休日の思い出を話合っていると、他組のY男が背中をぼんぼん叩く。と、腕力旺盛な男児数人が「こら、先生を叩いたな。」と、握りこぶしを振りながら近寄って行く。驚いたのはY男である。——皆と一緒に話を聞いてもらおうとしたまでの事だったのに。

又或時、他組のT子が廊下の隅で泣いていた。理由も問いただせず、その儘抱え上げて部屋の前を通りかかると、組で一番強いと認められているK一が「ハハーン、おかしいだい、先生に抱っこされて……。」と大声をあげながら寄って来る。部屋で積木をしていた子供達がわあっと集まり、腕にぶらさがりながら、附いて来る。T子を担任の同僚に渡し、さて部屋に帰ろうかと思う間もなくK一が「ねえ、抱っこしてねえ。」とささやく。

K一を抱くと「あーおかしい、あそこに赤ん坊が一人、あーおかしい。」と他の子供がからかう。その中の一人を抱くと又残りの連中がはやしたてる。

こうして四十四の武器は各自満足の行く迄はその引金を弛めようとしない。

他組の子供達が近寄って来れば、あわてて押しつけ、自分がその場に入る。

はじめての保育の経験

自分達の先生にはさわってほならないらしい。時々それが原因で腕の比べ合いが組同志で転開される。坂を上り子供達を送って行くと、見え始めた小学校から一団の生徒達が「○○先生、先生。」と同僚の名を呼びながら手を振っている。同僚と間違えているらしい。坂を下りその側を通る時、声をかけると「なあーんだ、新しい先生か。」とがっかりした様子に、却って気の毒な気がしたが子供達にはそれが気に入らない。

「あの人達間違えてから……ねえ、先生。」

「違ふよねえ、先生。」○○先生と違ふのにねえ。」と何度も弁解し合う。

四十四の愛の武器は未熟者であるからとおじ気でも、未経験者であるからと遠慮してもそれを認めてはくれない。

彼等の前にあつては、他の先輩と同等に見られ、それ以上に彼等の先生として一番信頼される。

拙ない先生が自信を持って歌う歌は元氣よく歌われるが、一度「こうだったかしら？」と自信のない歌い振りを示すともうだめだ。その歌はいつまで経っても元氣よく歌われない。

一度引金を引いた武器は発砲する以外には引金を弛める方法がない様に、彼等の頭に描かれた記憶は容易に消す事が出来ない。

それだけに、ただ新参者だからと、じっとしてはいられない気がする。

武器の引金を力一杯引けば、弾は遠く迄、力強く、飛んで行く。けれども引く力が弱ければ、当然飛ぶべきはずの距離まで飛ばず、地面に落下し、時には全々飛ばない事さえある。弾の飛ばぬか飛ばないかは引金を引いてみなければ、見当がつかないから始末が悪い。側で見物している時は、「もう少し手を力を入れれば、もっと飛びそうなのに……。」「もう少し手を伸ばしてすればいいのに……。」「さあ今度は飛びそうだ、どれ位の距離、飛べるだろうか。」と勝手に判断し、予測する。

しかし実際にその引金をさわってみて初めて、そのバネの意外にも硬い事に気がつき、引金を引き、弾の行方を見定めて初めて、「あっあそこ迄飛んだ。もう少し力を入れて引けばまだ向う迄飛んだらうに、惜しい事をした。」と気がつく。

子供達の場合もそれと同じだという事に気がついた。

子供の心に触れただけでは、「この子は少し落着きが必要ない様だ。かの子供には愛情が不足している。この子供は少し神経質すぎる。」と感じとれるだけで、どの程度その短所を直す可能性があるものか、又どの程度その持つ長所を伸ばす可能性が方によかったのか、失敗であったのか解るようだ。考えれば考える程、これでいいのだろうか、情性に流れてはいないだろうかと自信を失いそうになる。

四十四の武器の引金を引くべき務めを持たされた私ではある

が引金を引くところか、却って武器に支えられている実情である。その方向をどちらに向けたらよいものか、その引金が何処にあるのかさえ解らず、その位置を彼等に教えらるる。

共同製作という程のものではないが、部屋の壁板に貼ろうと思ひ、画用紙に苺を描いていた。子供達が見つけて寄って来る「先生何描いているの。」

「ここに苺の畑を作ろうと思つて描いてるの。」
「ふうーん、先生のいちご、おかしいね。」

という。「それじゃ、もつといい苺作つてよ。」と画用紙を与えたところ、手の掌大の苺を作り始めた。その苺を見た時、私にはまだまだ保育者になる資格がない事を痛切に感じた。

子供達の作つた苺は私の作つたものの四、五倍もある大きさだ。

私の作つた苺は赤色であるが子供達の作つたものは、赤色ばかりではなかった。白色、桃色のものが混じっている。苺の葉は所謂、葉っぱ色Ⅱ緑ではない。枯れた葉っぱがあれば藍色の葉っぱもある。

いろいろな失敗ばかり繰返しているがこの頃では、それでよいのだと思う様になつて来た。

子供の社会で、教えられ、導びかれながら、子供達をその地域社会に適応出来る人間に導く方法を習得する。

子供達との交流が激しければ、それだけ沢山の事を教えられ

又子供達もそれだけ成長して行くであろう。

それと平行して私自身もつと実社会と交流し、豊かな見識を持つ様に、努めなければならないと思つている。

幼年期の意味

ジョン・フイスク著 小川正通訳

新書版八四頁 定価八〇円 一六一円

進化論の立場から幼年期の重要性を鋭く衝く名著

日本の幼児教育

その問題点をめぐりて

長田新・山下俊郎・荘司雅子著

新書版一八四頁定価一三〇円一六一円

日本の幼児教育の問題点をえぐりだし

た鼎談

東京都千代田区 株式会社
神田小川町二ノ五

フレブル館